

項 目 名	改良着を着用
表 題	入院前より異食行動があり改良着を着用しているケースの廃止に向けての取り組み
施 設 名	西条愛寿会病院（介護療養型医療施設）

1 利用者の状況

年齢 90歳 性別 女性 要介護度 5 痴呆老人の日常生活自立度

【病名（既往症）及び病状】

脳梗塞後遺症 脳血管性痴呆特別養護老人ホームよりの入院痴呆、聴覚障害があり、意思疎通困難

2 施設内の生活における現状や課題

【身体的な状況】

- 食事摂取以外のADLについては、全介助。
- 立位不可。トランスファー全介助。車椅子操作全介助。
- 聴覚障害あり

【痴呆の状況】

- 食べ物や食器をおもちゃにしてしまう。
- 隣りの患者の食事を取って食べてしまう。
- 意思の疎通全く不可能で、机を叩いたり、絶えず大きな声で独語がある。
- 少し大きい声で声かけすれば返答はあるが、支離滅裂で会話は成立しない。
- 前施設入所中より便を食べたり、紙オムツをちぎって食べたりする。
- 目を離れた際にオムツをちぎって食べようとする。

3 拘束に至った経過や原因と考えられるもの

H8年4月に脳梗塞を発症し加療歴あり。以後右不全麻痺があったが伝い歩きは可能だった。痴呆症状の出現も認めていた。H12脳梗塞再発作。及び肺炎の合併を認め加療を受けた。以後歩行困難となる。その頃より、痴呆も一層進行し急にベッド上で立ち上がった。オムツはずし、弄便、異食行為もあり、目が離せない状態となり、改良着着用するようになる。

4 ケアカンファレンスでの意見や協議内容

- (1) 問題となる行為は、オムツはずし、弄便、便を食べたり、オムツをちぎって食べたりする。
- (2) 再アセスメントを行い以下の点を確認する。
 - ア 衣類（エプロン）などを渡すと、たたんだりする行為が見られた。
 - イ クラシック軽音楽を流して30分～1時間ぐらいたつと、机を叩かなくなったり、独語が少なくなった。
 - ウ パジャマの種類、着せ方によっては、オムツに手が届きやすい。
 - エ オムツいじりをしている時、おやつ（飴玉）やぬいぐるみ（ビニール、ゴム製）を渡すと、オムツいじりを止めた。
 - オ 食事は、一品ずつ手渡しを行うと自力で摂取し、おもちゃにしたり、遊びごとにしたりしない。
 - カ 食事中は見守りを行う。

5 拘束廃止に取り組んだ過程や取り組み状況

- 座位時間に注意しながら、日中は車椅子で過ごしてもらう。
 - 9:00～11:30 病棟レクリエーション見学
 - 14:00～15:30 ボール投げなどできるレクリエーションには参加する。
 - 15:30～ 水分摂取
 - 16:00～ 集団体操見学

- 夜間車椅子で過ごした時は、午前中ベッドで休んでもらう。
- デイルームで座っている時は、軽音楽を流しておく。
- 夜間は1時間ごとに見回り、不眠の時は見守りできる部屋に移して見守りをする。
- 巡回時覚醒しているときは、23時2時おむつ交換を施行する。
- 異食行為が頻繁にあるので、パジャマのボタンやオムツに手が届かないように、現在使用しているパジャマを前後反対に着せたり、パジャマの上からエプロンを着せることから、改良着の着用の廃止に取り組み、その後、通常のパジャマの着用ができるようになった。
- 口の中に入れても害のないエプロン、カーディガン等を渡し手遊びを促す。
- 見守り中手をなめたり、オムツに手が届きそうなときは、おやつ（飴玉）をなめてもらったり、ぬいぐるみ（ビニール、ゴム製）等で手遊びを促す。
- 便のコントロール
- 主治医と連携しながら安定剤を投与し、昼夜逆転を予防する。

6 改善の成果

全スタッフが統一したケアを実施することで、現在は生活のリズムが安定し、オムツを食べる等異食行動も無くなり、改良着の着用を中止できた。

7 担当職員の感想、意見

- 拘束廃止は全員で協力して取り組めばできる。
- 拘束を止めることがケアの向上につながる。
- 拘束によりA D Lが低下する。
- 問題行動 = 拘束ではなくなぜそのような行動をとるのか理解する。

「拘束しなくても原因を探り、原因に基づいた対応をする事で拘束は中止できる。」と、身をもって実感できた。これからもベストのケアをめざし、スタッフ全員で協力して、事故のないよう注意しながら自信と自覚を持って取り組んでいきたい。